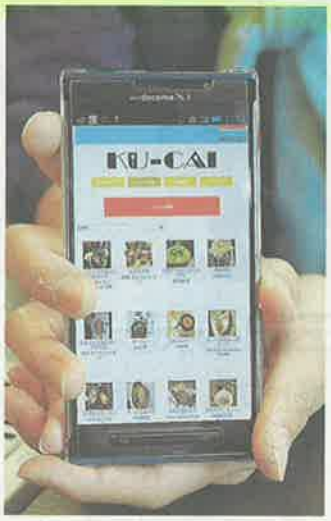
近大の地元商店街
学生が集客手助け

近畿大（東大阪市）の学生が、地元の商店街を活気づけようと、インターネット交流サイト「フェイスブック（FB）」を使った集客作戦に乗り出した。専用アプリを開発し、飲食店を紹介、サイト内の「友達」を使ってその情報を拡散させる。関心は高まりつつあり、店主らも期待を寄せている。



近大の学生らが取り組むフェイスブックを使った商店街活性化プロジェクトでは、各店のおすすめ料理をスマートフォンで一覧できる

経営学部生がFBアプリ開発

企画したのはITビジネスを研究する経営学部の鞆大輔准教授のゼミの3年生17人。大学から近鉄長瀬駅までの約1キロには飲食店など約120店が並ぶが、ここ数年、景気の低迷で学生の利用も減っている。学生代表を務める溝口和彦さん(22)は「地元商店街の新たな顧客獲得につなげて活性化を支援したいと考えた」と話す。

学生らはまず、フェイスブック専用のアプリを開発。通常の投稿の場合、投稿記事を見たサイト内の「友達」が「いいね！」ボタンを押して反応を示すが、投稿記事に対し、「おいしそう！」「食べたい！」などのボタンを押せるようにした。サイト内の「友達」がお店に行きたいと思うきっかけとなるのが6月10日から7月9日までの約1カ月間、お店で食べた料理についてフェイスブックに投稿している。7月3日時点の中間結果では、登録者が199人で、料理の投稿数が79。「評価」の投票数は360。連合商店街代表でお好み焼き店を営む鈴木博和さん(43)は「学生からお客としての声を聞けるのはありがたい。商店街がフェイスブックを利用するきっかけにもなった」と歓迎する。（大宮司聡）